論文名：井上靖の西域物に関する研究（要約）

新潟大学大学院現代社会文化研究科
氏　名：劉東波（LIU Dongbo）

本研究の目的は、井上靖の西域物を中心に、中央アジア探検及び敦煌学の発展が西域物の創作過程で果たした役割に着目することで、日本近代に誕生した西域物の創作の原点を探るとともに、各作品の典拠を考察し、敦煌学と日本近代文学との関わりを解明することである。そのうえで、作品の創作方法や主題を考察し、日本近代文学における西域物の文学的価値を検討した。

本論文は第一章から第三章までの三部で構成されている。全体の構成（目次）は以下の通りである。

序章　総論

第一章　日本近代文学における西域物
　第一節　宮澤賢治の西域物
　第二節　松岡譲の西域物

第二章　井上靖の西域物の誕生
　第一節　西域物の源泉――「漆胡樽」
　第二節　対の器物から生まれた作品――「玉碗記」
　第三節　西域で活躍した人物――班超

第三章　井上靖の西域物の発展と変遷
　第一節　「楼蘭」と『敦煌』
　第二節　西域の水･河（川）を描く作品――「洪水」
　第三節　史実に即した作品――後期の西域物

終章　まとめと今後の課題

第一章では、井上靖の前に西域物を創作した二人の作家、宮澤賢治・松岡譲及び彼らの作品をめぐって､近代中央アジア探検及び敦煌学の誕生が宮澤賢治･松岡譲に与えた影響について考察を行った。賢治は近代日本文学で最も早く西域物を創作した作家の一人である。賢治が西域物を創作した時期は、ほぼ敦煌学が誕生した時期と重なっている。そのため、賢治の西域物の創作に、敦煌学の研究成果が果たした役割は大きいとは言えない。第一節では先行研究を踏まえながら、敦煌学とは別に賢治の西域物の原点に遡った。さらに、賢治と島地大等との関わりを考察し、近代中央アジア探検が賢治の西域物に与えた影響を

究明した。

松岡譲に関する研究は極めて少ないため、第二節では松岡譲研究の現状から論を展開し、『敦煌物語』を取り上げ、創作経緯を考察し、典拠研究を通して松岡の創作方法及び作品の主題を検討した。さらに、資料調査で集めた資料を紹介し、調査の成果（史料館所蔵資料リスト、インタビューの実録）を付録に添付した。

第二章では、井上靖初期の西域物三篇を取り上げ、それぞれの作品の創作背景から創作方法まで詳しく分析した。第一節では、井上靖が「漆胡樽」を創作する際に参照した「漢籍」を探り、作品の創作方法及び作品における虚構を究明した。次に、「漆胡樽」と他の西域物の関連を分析し、井上靖の西域物における「漆胡樽」の位置づけを検討した。第二節では、「玉碗記」の典拠、及び作品に描かれている対構造を中心に考察を行った。第三節では、井上靖の初の本格的西域物である「異域の人」に描かれている主人公・班超の生きる意味について検討した。典拠と比較すると、ただ史料を引き写すのではなく、何種類の史料（記述）からもっとも正確なものを追求する井上の創作姿勢が窺える。

第三章では、井上靖の中期の西域物「楼蘭」『敦煌』「洪水」と、後期の西域物「僧伽羅国縁起」「羅刹女国」を取り上げ、各作品の典拠や登場人物の人物像に対する考察から、井上靖の各時期の西域物の特徴を明らかにした。第一節では井上靖の西域物の代表作「楼蘭」と『敦煌』を取り上げ、特に、『敦煌』に重点をおき、作品の創作背景、史料の活用方法及び創作方法を考察し、主要登場人物の人物像を詳しく分析した。第二節では、水・河（川）を描く西域物である「洪水」を取り上げた。「洪水」典拠の再検討を通して、『彷徨へる湖』との関わりを明らかにし、「洪水」が「楼蘭」の延長線上の作品であることを示した。第三節では、「崑崙の玉」「僧伽羅国縁起」「羅刹女国」を取り上げ、井上靖の後期の西域物の創作方法及び作品の特徴を詳しく考察した。三作品は井上靖と大岡昇平との文学論争が起こった後に創作された作品である。前期・中期の作品と比べてみると、後期の西域物に創作方法の改変が見られる。「崑崙の玉」は黄河の源に遡る歴史を描いた作品である。作品の典拠に関する指摘が少ないため、本節では実証的な研究を中心に、作品の典拠と方法を考察した。本作品には、様々な人の冒険や河源説の変遷が描かれ、長い間中国を支配した錯誤の河源説、歴史発展の原動力の一つでもあったことを語っている。本作品は井上靖の西域物の集大成的な作品だといえよう。

第三節の最後に、「僧伽羅国縁起」と「羅刹女国」の二作品を取り上げた。二作品は同一の典拠資料『解説西域記』による。そのため、典拠と比較をしな

がら、作者の改変を中心に考察した。典拠には、宗教的要素が多いが、井上靖の処理を通して、原典の宗教性が弱められ、それにともない物語の教訓性がより一層強化された。本節では、物語の創作方法の追求、主題の解明などにより、二作品の再評価を試みた。

現時点で、日本近代文学における西域物の研究はいまだ不十分であるため、本研究を進めるにあたって、多くの資料を集めるとともに、「井上靖の西域物年表」等を作成した。それら多数の資料を巻末付録として添付した。

上述した比較研究や典拠研究を進めることにより、日本近代文学における西域物の誕生をより広い視野から捉えることが可能になったと考えられる。本論文では、近代の中央アジア探検と敦煌学が西域物の誕生に与えた影響を究明し、宮澤賢治・松岡譲・井上靖の西域物の創作方法及び作品に託されている各作家の夢や理想を考察した。しかし、本論文では賢治の西域三部作や松岡の他の西域物の考察にまでは及ばなかった。また、井上靖の西域物の創作方法に影響を与えた『蒼き狼』についても触れることができなかった。今後は、各作家の西域物をより広い視野から分析することで、それぞれの西域物の特徴や相互の影響関係を一層解明したいと考えている。